

心大血管手術後の非A非B肝炎発症に関する統計学的解析

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Takahashi, Hideo メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/14782

学位授与番号	医博甲第 936 号
学位授与年月日	平成 2 年 3 月 25 日
氏 名	高 橋 英 雄
学位論文題目	心大血管手術後の非 A 非 B 肝炎発症に関する統計学的解析

論文審査委員	主 査 岡 田 晃
	副 査 岩 橋
	小 林 健 一

内容の要旨および審査の結果の要旨

心大血管術後における輸血後非 A 非 B 肝炎（以下本症）は重篤な合併症の一つであるが、本症発症には術前から術後を通しての種々の因子が複雑に関与すると考えられるため、その危険因子については多次的に解析されなければならない。そこで本症発症と諸因子との関連を従来行われてきた単一変量解析のみならず新たに多変量解析をも用いて検討した。

本研究では昭和60年1月より昭和63年7月までに金沢大学第一外科において体外循環装置を用いた心大血管手術 598 症例を対象とした。成人群と小児群それぞれにおいて本症に関与する諸因子を発症群、非発症群にわけて分析し検討した。成人群では、Student-t 検定及び χ^2 検定による単一変量解析に加え、肝炎発症の有無に従い判別分析、質的因子を中心とした数量化Ⅲ類による総合的解析を行った。小児群では同じく単一変量解析および術前 G P T 値と術後一ヶ月 G P T 値との差 Δ G P T を目的変数とした重回帰分析を行った。結果は次のごとく要約される。

- 1) 成人群では、発症群で有意に高値を示したものは手術時間、輸血量であった。また輸血量と肝炎発症率との間には顕著な量一反応関係を認めた。
- 2) 成人群における判別分析の結果では特に手術時間および人工心肺装置充填血液量が本症発症の危険因子と推定された。また数量化Ⅲ類により肝機能障害の既往、術後合併症も危険因子であることが明かとなった。
- 3) 小児群の発症群で有意に高い傾向を認めたのは体外循環時間、大動脈遮断時間であった。また成人群で危険因子と推定された手術時間、輸血量には有意差を認めなかった。
- 4) 小児群における重回帰分析の結果、新鮮凍結血漿使用量が術後の G P T 上昇に大きく関与していた。

これらの結果から、本症の発症過程においては成人群と小児群ではその危険因子を異にしており、成人群においては従来指摘されてきた手術時間、輸血量の他にも人工心肺充填血液量、肝障害の既往、術後合併症の存在が危険因子であること、一方小児群においては成人群と異なり大動脈遮断時間、体外循環時間、新鮮凍結血漿使用量が危険因子となっていることが明かにされた。

以上の研究成果は、心大血管術後の輸血後非 A 非 B 肝炎発症の解明に寄与する劣作であり、心臓血管外科領域のみならず予防医学においても有用な知見を提供するものとして評価された。